

## 同志社大学所蔵「源語」解題

岩 坪 健

はじめに

本学所蔵の「源語」二巻は源氏物語の絵巻で、五四帖揃いの卷子本である。一帖につき和歌短冊（その巻で詠まれた和歌を短冊に記したもの）と絵が一枚ずつあり、書風も画風も江戸時代後期と推定される。全帖の翻刻や絵の解説は別稿を用意しており、本稿では全体に関わる問題などを取り上げる。

### 一、絵と和歌短冊

五四枚の絵はそれぞれ独立しているものもあれば、前後の巻に続くものもある。たとえば1桐壺（第一帖、桐壺の巻という意味。以下同じ）と2帚木の絵は別々であるのに対して、2帚木の舞台は宮中、3空蟬は紀伊守邸と場所が異なるにも拘らず、両方の建物が庭

を挟み一枚の絵のように見える。そのほか26常夏（内大臣邸）と27篝火（六条院）も、まるで同じ敷地内にあるかのように描かれている。このほか12須磨と13明石は海岸線が繋がっている。ただし、このように連続して描くのはなかなか難しいので、多くの巻々は一図ずつ独立している。

和歌短冊は各図の右端に、前巻との境界に重なるように一枚ずつ貼られている。短冊を透かして下の絵が見え、その部分も彩色されているので、絵が仕上がって継がれた後に短冊が貼られたと考えられる。ただし短冊の下が墨書きのまま、彩色されていない箇所が一例だけある。それは50東屋で、前帖の絵と続いていて、両図の境には菊花が咲いている。短冊で隠れた菊花は線描だけで彩色されていないが、短冊の外側にある花は赤・白・黄色に塗られている。このような例は他には見られないので、おそらくこの菊花だけ短冊を

貼ったのち塗り忘れに気づき、短冊に隠れていない花だけ色付けしたのであろう。このように描き忘れたかと思われる例を、次節では巻の順に列挙する。

## 二、描き落としした例

7 紅葉賀。光源氏と頭中将が青海波を舞う場面。試楽は清涼殿の東庭で行なわれたが、そこにはない紅葉が描かれているので、朱雀院での本番であろう。二人とも挿頭の紅葉を付けていたが、源氏は菊花に差し換えた、と物語にはある。二人の挿頭の草花を描き分けた絵もあるが、本作品「源語」では二人とも何も付けていない。

ちなみに本学所蔵「源氏之繪」<sup>②</sup>も同じ場面で、草花を付けていない。24 胡蝶。秋好中宮が催した法会に、紫の上が八人の童女を使者として送った場面。物語では四人が迦陵頻（極楽の鳥）、別の四人が胡蝶に扮した舞装束を着て、鳥は銀の花瓶に核、蝶は金の花瓶に山吹を挿して持つとある。絵もそのように描かれることが多いが、「源語」に描かれた花瓶はすべて空になっている。

25 螢。螢宮が玉鬘を訪ねた場面で、物語では養父の光源氏が几帳<sup>かたむち</sup>の帷子<sup>かたむち</sup>を上げて放った螢の光で、宮は玉鬘の美しい姿を見る。一方「源語」に螢が描かれないのは、螢が放たれる前であろうか。

29 行幸。物語では冷泉帝が光源氏に使者を遣わし、「さじ<sup>サシ</sup>一枝」

（中五二二頁<sup>③</sup>）を贈ったとある。絵では一羽しか確認できないが、『湖月抄』所引の『河海抄』は雌雄の雉を一羽ずつ一枝に付けると解釈し、源氏絵でもそのように描かれることが多い。例えば本学所蔵の「源氏物語色紙」<sup>④</sup>も一枝に雄は上、雌は下に付けられている。

30 藤袴。夕霧が玉鬘と御簾越しに話している最中、持っていた藤袴の花を御簾の端からさし入れ思いを訴えた和歌を詠む、という巻名にちなむ場面であるが、「源語」では藤袴は見当らず、これでは画竜点睛を欠く。

31 真木柱。真木柱の姫君が今まで住んでいた父親の家を離れる時、普段寄りかかっていた柱のひび割れた所に、笄<sup>こうがい</sup>の先を使って檜皮<sup>ひわだ</sup>色の紙に書いた和歌を押し込む場面だが、「源語」には紙も笄も見えない。

45 橋姫。薫の君が宇治の八の宮を訪れると、姫君たちが琵琶と箏の琴を演奏していた。この場面は国宝源氏物語絵巻にも取り上げられ、室内には二人の女君と二つの楽器を描き、物語の内容に合う。

ところが「源語」は琴がなく、琵琶を弾く人は月を見上げ、隣の人はうつむいて床を見ている。物語には「そひふしたる人は<sup>琴</sup>こと<sup>上</sup>うへにかたぶき<sup>帳</sup>かか<sup>帳</sup>りて」（下三二九頁）とあるので、顔を伏せた人の前に琴があったと推定される。本学蔵「源氏之繪」（注②参照）も同じ場面で、琴がない。女性は二人いるが、一人は琵琶を弾く人の

斜め前にいるので、女房ではなからうか。とすると、琴を弾く人もいないことになる。

以上の七帖について、本学所蔵の源氏絵で五四図揃っている二作品と比較してみよう。一つは「古土佐源氏五拾四状画賛」と表紙の題簽に墨書されたもの（以下、「古土佐」と略称する<sup>⑤</sup>）、一つは詞書の筆者目録に「源氏御手か、み」（略称「源氏御手」）と書かれたものである<sup>⑥</sup>。次の一覧表で右端の項目は帖数と「源語」に欠くモチーフを記し、それが描かれていないと×、描かれていれば○、別の場面である図は／で表す。

		7挿頭	24花	25蛩	29二羽	30藤袴	31紙筭	45琴
古土佐	／	×	×	○	×	○	／	×
源氏御手	○	○	／	×	○	／	×	×

「古土佐」も「源氏御手」もモチーフを欠く45橋姫を詳しく見てみよう。「源氏御手」は「源語」と同じで三人の女性がいて、一人は簀子に、二人は畳の間にいて琴がない。琵琶を弾く人は見上げ、隣の人はいうつむくという図様も共通する。「古土佐」の45橋姫も女性は三人だが室内には琵琶を弾く人しかいず、あとの二人は簀子にいる。そのほか「古土佐」は蛩・藤袴が無い点では「源語」と同じだが、24胡蝶では「源語」が空瓶であるのに対して手に何も持っていない。

ない。わずかに二作品との比較ではあるが、「源語」の描き落としは「源語」だけの特徴ではないことが確認できる。当時は手本の模写が修業の基本であった。その手本が何度も転写されていく過程で細かい描写が見落とされたのではなからうか。次節では別の理由を考えてみよう。

### 三、素描の解釈

東京都立中央図書館所蔵で「源氏下繪四巻笹山」と題された卷子本一卷（加賀文庫4469）は、五四図の下図で彩色されていない。たとえば45橋姫を見ると前掲の場面で、簀子と屋内に女性が二人ずつ座っていて、室内の二人は琵琶と琴を前においている。琵琶は形が独特なので墨書きでも一目瞭然であるのに対して、琴は絞も琴柱も省略されていて細長い長方形に見え、物語の内容を知らないと理解できず、やがて写されなくなるのではなからうか。たとえば狩野探幽筆「源氏物語図屏風」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）橋姫の巻も同じ場面で、二種の楽器が描かれている。琴は女君と襖との狭い間に畳の縁に沿って置かれ、琴の半分は袖に隠れている。この図を素描すると、襖の側にある四角い物は転写を重ねると実体不明になる可能性が考えられる。

次に「源語」の46椎本は、阿闍梨の使いが女房から返礼の品を受

け取る場面である。物語本文は「わたきぬ」で、現代では「綿衣」と漢字を当て防寒用の綿入れの衣服と解釈する。しかし中世の注釈書を集大成した『萬水一露』<sup>ばんすいちろう</sup>や『岷江入楚』<sup>みんかうじつそ</sup>では「綿絹」と読み、源氏絵も綿や絹糸を束ねた摘綿を描く。「源語」では女房が差し出す入れ物の中の物は桜の花弁のように見えるが、それは絹か綿の写し崩れと推測されよう。そのほか11花散里は、光源氏が麗景殿女御（桐壺帝の女御）と昔話をしているところである。橘の花が香りほととぎすの鳴き声が聞こえて、と物語には書かれていて、絵でも橘の木とほととぎすは必須のモチーフである。「源語」にもほととぎすは飛んでいるが、庭の木は柳のように見える。これは転写を重ねたため橘が柳のようになったか、あるいは下図の樹木を柳と見間違えたからであろう。<sup>⑦</sup> もう一例挙げると43紅梅で、紅梅大納言が書いた手紙は物語には「紅のかみ」<sup>くれゐ</sup>（下三三八頁）とあるが、「源語」では白い紙になっているのも、塗り忘れてなければ、手本にした下図が無彩色で、色の指示もなかったであろう。

50東屋は一人の女性が両手で手紙を広げて読み、そばの床には白い紙の上に硯箱が置かれ、傍らにもう一人女性がいる。どの場面か判別したいが、前掲の狩野探幽筆「源氏物語図屏風」東屋の巻も同じ図で、それを瀧澤彩氏は国宝源氏物語絵巻（隆能源氏）第一図と同じ場面（中の君が絵を出して浮舟に見せ、右近に物語の詞書を

読ませる場面）と認定された。<sup>⑧</sup> この場合、物語絵に見入る浮舟が転写の過程で消え、詞書が手紙と見なされ、絵巻物を入れた箱は硯箱に変じたと推測される。

#### 四、場面が確定しにくい図

先の50東屋は転写を重ねて無くなる、または写し崩れと見なしたが、ほかにも場面が定められない図が二例ある。一つは36柏木で、別稿（注①の解説）では以下のように解釈した。

女三の宮は柏木の手紙を前に置き、右手に筆、左手に紙を持ち、袖で涙をぬぐいながら返事をしたためている。画面の右下にいるのは、二人の仲を取り持った小侍従（女三の宮の乳母子。伯母は柏木の乳母）。硯箱の中には硯・筆・墨がある。（新編全集④二九二頁）<sup>⑨</sup>

しかしながら、この場面は春だが庭に紅葉があり季節が合わず、似た図様を探すと狩野探幽筆「源氏物語図屏風」柏木の巻も同じ図様で、前栽は緑色に見える。さらに版本の挿し絵にも目を向けると、承応三年（一六五四）頃に成立して野々口立圃が描いた、無刊記本『十帖源氏』にも似た図があるが、それは別の巻（若菜下の巻）<sup>⑩</sup>で、出家した朧月夜が光源氏の手紙を読む場面である（新編全集④二六一頁）。「源語」50東屋との相違点は筆・硯箱・紅葉がないことと、

袖を顔に当てていない点である。

47総角も、似た図が別の巻に見られる。別稿(注①の原稿)では次のように解説した。

烏帽子に直衣姿の薫が、几帳(物語では屏風)の向こうにいる大君に迫るが、扇で顔を隠して拒まれる場面。ただし物語では扇は記されず、また絵では喪服姿に描かれていない。奥の女房は大君に付き添うように言われていたが、御前を退いている。(新編全集⑤二三四頁)

この絵の図様は、匂宮が初めて浮舟を見つけて言い寄る場面(東屋の巻)に似る。「衣の裾をとらへたまひて(中略)扇をさし隠して、見かへりたるさまいとをかし。」(新編全集⑥六一頁)。また庭の描写も、「色々に咲き乱れたるに、遣水のわたり石の高きほどいとをかしければ、端近く臥してながむるなりけり。」(新編全集⑥六〇頁)とあり本図に合う。

本図もまた、狩野探幽筆「源氏物語図屏風」総角の巻と構図が同じである。このように男君が迫り、女君が扇で顔を隠すという図様は、他の巻にも見出せる。たとえば源氏物語の絵入り版本で最古とされる慶安三年(一六五〇)跋・承応三年(一六五四)版(以下、承応版と略称する)では東屋の巻のほか、紅葉賀の巻にも同じ図様が見られる。そのほか延宝三年(一六七五)に刊行された鶴屋版(江戸

版大本)『源氏小鏡』螢の巻にもあり、吉田幸一氏は「図様個所未詳」<sup>①</sup>とされた。特定できないのは、男女の出会いや手紙を読む場面などは繰り返しの物語で語られるからで、そのため絵も別の場面に転用されることが多い。<sup>②</sup>

#### 五、版本の挿し絵との関わり

「源語」の絵で、肉筆画よりも木版画に類例が見出せる例を取りあげる。まずは承応版と比較してみよう。42匂宮は生来かくわしい薫の君に対抗して、香りのよい植物に執着した匂宮が庭の前栽を眺めている様子を描く(新編全集⑤二七頁)。室内に男君が一人だけいる構図は承応版と共通する。毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」は匂宮が四人の男性を従えて庭をそぞろ歩く図様で、解説には「この帖では珍しい場面選択であるが、室町時代の扇絵と江戸時代の版本の挿し絵に例がある。」(注⑧の著者)と記されている。

次に6末摘花に移ると、末摘花を紹介した大輔命婦が光源氏に、末摘花からの手紙と直衣を届けた場面である(新編全集①二九八頁)。光源氏は左手に手紙を持ち、大輔命婦は正月用の直衣を見せられている。直衣は物語本文では衣裳箱に入れて贈られたとあるが、絵では省略されている。承応版は箱に衣装が収められ、光源氏が末摘花の手紙に書き込んでいる図で、「源語」とは時間のずれがあるが、

他に当該面を描いた作品は彩色図では管見の及ぶ限り見当たらない。<sup>13)</sup>

28野分は室内に一組の男女がいるだけで、あとは屏風と几帳しかなく、どの場面か判断しがたい。もし琴があれば光源氏が明石の君を見舞った場面、硯箱ならば夕霧が明石の姫君のを借りた場面と認定できる。また垣間見ている夕霧がいれば、光源氏と紫の上か玉鬘になる。二人しかいない図を探すと、浮世絵師の溪斎英泉が描いた文化九年（一八一二）元版『源氏物語絵尽大意抄』<sup>14)</sup>が挙げられるが、男性は渡り廊下に出て女性は部屋端に近づく。一方、明暦三年（二六五七）版『源氏小鏡』は實子に女房が一人いるが、二人の男女は室内にいて、この方が「源語」の構図に近い。女君は琴を弾いているので、光源氏が明石の君を見舞う場面と判断できる。ちなみに万治三年（二六六〇）版『源氏鬢鏡』も明暦版と構図は同じであるが、琴はない。うつむいている女君を男君が振り向く図様は「源語」に似るので、両図とも光源氏と明石の君と見なしてよからう。最後に場面が確定でき、類例が今のところ見出せない52蜻蛉を挙げる。それは女一の宮が住む西の渡殿で、薫が女房たちと会話に興じる場面である（新編全集⑥二七一頁）。絵になる場面を選んだ『源氏物語絵詞』<sup>15)</sup>には取りあげられ、「絵とすべき図様を詳細に記述して呈出したもの」（注⑮の解題）は以下の通りである。

一品宮の上つほねに女房共月をみて、みすまきあける居たるへ

し。ことなど引。かほる行給ふに、こと引きしたり。中将のおもとなとあるへし。かほる和琴引給所也。律のしらめ平調か。<sup>16)</sup>  
八月十五夜とみえたり。

「源語」の絵と比較すると、画面の左上に満月が見え、御簾を巻き上げた室内には三人の女房のうち一人（中将のおもと）が薫と向き合い、向かい合う二人の前にはそれぞれ琴が置かれ、すべて前掲の図様指示と符合する。ただし庭にトンボが二匹飛んでいるが、これは当該面には見られず、当巻の最末尾で薫が飛び交う蜻蛉を見て巻名歌を詠む折に登場する（新編全集⑥二七五頁）。それは『源氏物語絵詞』には採られず、「あまり作例のない珍しい場面」である。<sup>16)</sup>

#### 六、巻名歌の本文

「源語」には各図の前に、その巻で詠まれた和歌を記した短冊が貼られている。計五四首のうち、次の二首だけ本文が特異である。まず50東屋のを翻刻すると、

みし人のかたしろならば身にそへて恋しき人のなて物にせむとなり、四句目の「恋しき人の」は「源氏物語大成 校異篇」「源氏物語別本集成」所収の伝本すべて、および『源氏小鏡』『源氏大鏡』も「恋しき瀬々の」である。「瀬々」は折々と訳すが、多くの瀬という意味もあり「なで物」の縁語になる。「恋しき人」でも歌

全体の解釈はさほど変わらないが、「見し人」と同じ人を指すので重複する。

一方、次の22玉鬘は本文により解釈が異なる。短冊の和歌は、恋わたる身はそれならてたまかつら如何なるすちをたつね來つらむ

のように第二句は「身はそれならで」であるが、『源氏物語大成校異篇』『源氏物語別本集成』を見ると、別本の保坂本だけが「それならで」、河内本系統の二本（御物本・大島本）が「それなから」で、ほかは全本「それなれと」である。『源氏大鏡』は「それなから」、「源氏小鏡」は伝本により三種類のいずれかに分かれる。「それならで」の「で」は打ち消しなので、ほかの本文とは解釈が逆になり、「それなれと」はそれであるけれど、「それながら」はそのままで、「それならで」はそれではなくてと訳せる。

「源語」のように各帖とも一図に二首を添える場合、巻名歌と呼ばれる和歌を選ぶのが通常である。巻名歌の撰者も成立年代も、また選定する基準も不明だが、全五四首のうち四二首は巻名または巻名の一部を含む<sup>①</sup>。ところが「源語」は二六首も巻名歌ではない。匂宮・夢浮橋の巻は一帖に一首しかないので除くと、計五二首のうち半数は別の歌に置き換えられている。巻名が巻名歌にはなく「源語」歌にあるのならば、巻名を詠みこんだ歌に換えたと考えられる

が、その例はない。逆に巻名が巻名歌にはあるのに「源語」歌にはない、という例が過半数を占める。また巻名歌は絵に関わる、という仮説を立てたが（注①参照）、「源語」歌よりも巻名歌の方が絵の場面で詠まれたものである。というわけで、「源語」が巻名歌を別の和歌と取り換えた理由は判然としない。

おわりに

「源語」と狩野探幽筆「源氏物語図屏風」を比べると、両者がよく似るのは一八図で、やや似る一三図を合わせると、過半数にも及ぶ。その一方、蓬生・関屋の巻の順序が違うなど相違点も多く、今後調査を続けていきたい。

注

- ① 「同志社大学所蔵「源語」の紹介——翻刻・現代語訳・解説——」（同志社大学人文科学研究所「社会科学」第五一卷第四号、二〇二二年二月）に掲載予定。
- ② 箱の蓋に「源氏之繪 詞書在 土佐光信筆」と墨書され、五図からなる。岩坪健「同志社大学所蔵 源氏物語絵の紹介」（『同志社国文学』第 八四号、二〇一六年三月）参照。
- ③ 物語本文は北村季吟『源氏物語湖月抄』により、（ ）内に講談社学術文庫の巻数（上中下）とページ数を示す。
- ④ 岩坪健「同志社大学所蔵「源氏物語色紙」の紹介——翻刻・現代語

- 訳・解説——」(『社会科学』第五〇巻第四号、二〇二二年二月)参照。
- ⑤ 岩坪健「同志社大学所蔵 源氏物語絵の紹介」(『同志社国文学』第八四号、二〇一六年三月)参照。
- ⑥ 岩坪健「源氏物語画帖「源氏御手か、み」(同志社大学蔵)の紹介」(『同志社国文学』第八一号、二〇一四年一月)参照。
- ⑦ ちなみに個人蔵「白描源氏物語画帖」の花散里・濔標の巻は、いずれも五月雨の折に光源氏が花散里邸を訪れた場面である。前者が橋の時鳥であるのに対して、後者は柳に水鶏である。物語には橋と時鳥・水鶏は書かれているが、柳の記述はない。しかし濔標の巻で花散里邸には柳と定まり、それが花散里の巻にも影響を及ぼした可能性も考えられる。なお当画帖は全図が「奈良県立美術館」第三五号(二〇二二年三月)に収められ、三浦敬任氏が詳細に解説されている。
- ⑧ 瀧澤彩氏「源氏絵場面一覧」、同氏「絵巻で読む源氏物語——毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」所収、三弥井書店、二〇一七年三月。ちなみに注1の小稿では、「中将の君(浮舟の母)から届いた手紙を中の君が読んでいるところ(新編全集⑥三九頁)か。控えているのは中の君の女房で、かつて中将の君と同僚であった大輔か。ただし「源氏物語絵詞」には採られていない。」と解釈した。その場面ならば写し崩れは起きているまい。
- ⑨ 「新編全集」は新編日本古典文学全集「源氏物語」(小学館)の略称。「④二九二頁」は第四冊の二九二頁を示す。
- ⑩ 吉田幸一氏「繪入本源氏物語考」下(日本書誌学大系53)所収、青裳堂書店、一九八七年一〇月。
- ⑪ 吉田幸一氏「繪入本源氏物語考」上、三四八頁。
- ⑫ 岩坪健「源氏絵の型について——絵入り版本「源氏物語」(山本春正画)を中心に——」(『同志社国文学』六三、二〇〇五年二月)。後に
- 『源氏物語の享受——注釈・梗概・絵画・華道——』(和泉書院、二〇一三年)所収。
- ⑬ 名古屋市博物館所蔵「白描源氏物語画帖」に、当該図と考えられる絵がある。ただし本画帖は詞書が無く、五四図の絵が現存する。末摘花の巻には二図あり、ことによると「源語」に似た一図は他の巻かもしれない。詳細は藤田紗樹氏「近世前期における白描物語絵制作の様相——名古屋市博物館蔵「白描源氏物語画帖」と「伊勢物語手鑑」の制作をめぐって——」(『名古屋博物館研究紀要』第四四巻、二〇二二年三月)参照。
- ⑭ 小町谷照彦氏「絵とあらずじて読む源氏物語——漢斎英泉「源氏物語絵尽大意抄」——」(『新典社』、二〇〇七年)に影印を収める。
- ⑮ 片桐洋一氏「大阪女子大学物語研究「源氏物語絵詞」——翻刻と解説——」、大学堂書店、一九八三年一月。
- ⑯ 『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語 二四一頁の解説、学習研究社、一九八八年六月。ただし承応版など版本の挿し絵には、巻名にちなむ場面としてよく描かれている。
- ⑰ 詳細は岩坪健「源氏物語巻名歌の成立に関する一考察——スベンサー本「白描源氏物語絵巻」との関わり——」(同志社大学「文化学年報」七〇、二〇二二年三月)参照。
- ⑱ 現在では第一五帖が蓬生の巻、第一六帖が関屋の巻であるが、探幽筆「源氏物語図屏風」では逆になっている。その理由を秋山光和氏は、「蓬生」を「関屋」の下に配して右隣の「花散里」の構図との相関を測っている。」と解釈された(『皇室の秘宝2 御物 絵画Ⅱ』二〇五頁、毎日新聞社、一九九一年五月)。しかしながら中世においては関屋・蓬生と続くこともある。たとえば一四世紀に原型が成立したと推定される『源氏小鏡』は江戸時代になると版を重ねるが、最古の整版と思われる

無刊記本は関屋・蓬生の順である。このほか今では第四三帖を紅梅の巻、第四四帖を竹河の巻とするが、中世では逆の例もある。

〔付記〕 「源語」をはじめ本学所蔵の源氏絵（注2456参照）はすべて、

同志社大学図書館デジタルコレクションにて公開されている。

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（2019～2021年度）、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、2020～2022年度）における研究の一部であり、また同志社大学宮廷文化研究センターの事業の一環である。